



建築学科草創記

高木幹朗*

Recalling the Foundation of the Department of Architecture

Mikio TAKAGI*

1. はじめに

本学の建築学科は、昭和40（1965）年4月にその第一歩を踏み出した。工学部5学科の中では最も遅い出発ではあったが、それでも既に40年を超えて2014年にはめでたく半世紀の歴史を重ねることになる。

当初の学科設立と教育に情熱を注ぎ、初期の授業を担当されておられた諸先生方は、すでに全員がご定年で退官されており、建築学科草創期の状況を今に伝える術は極めて少なくなりつつある。

数年に及ぶ学科設立準備に奔走され、初代学科長として学科運営に努力されていた谷口忠先生（耐震工学。東京工業大学・神奈川大学名誉教授。筆者の大学時代の構造力学の先生）から、新しい学科づくりに当たっては是非ともデザイン系の若い人の手を借りたい、とのご要望をいただいた私は、大学卒業以来勤めていた石本建築設計事務所を辞して、初年度の半ばを過ぎた昭和40年10月に、本学建築学科の助手に身を転じた次第である。

当初は、数回の卒業生を輩出して社会での活躍を見届けて、学科もある程度軌道に乗ったところで、再び設計事務所に戻るか或いは自分でアトリエを構えようかと考えていたことは否めない。しかし、常に新鮮で元気な若い人たちと接しながら、共に学ぶ生活は思いの外楽しくかつ魅力的で、私のそうした思いを徐々に薄らげていくこととなった。その後、紆余曲折はあったものの、とうとう定年を迎えるまでお邪魔してしまったようである。

退職に際して、拙文を掲載する機会を頂いたので、何とか設立時のことを思い出しながら、少しでも学科草創期のことなどを記し残しておきたいと思い、「草創記」なるタイトルで、ここに一筆したためさせていただいた。

2. 学科創設時の社会状況

学科創設の昭和40（1965）年といえば、その前年（1964年）10月に「東京オリンピック」が開催され、それに向けたオリンピック関連施設の建設や、開会直前の東海道新幹線の開業。高速道路網の整備などとともに、多くの建築のスクラップ&ビルトが続いていた時期である。そして1968年4月には、我が国超高層ビルの先駆けとなる「霞ヶ関ビル（147m）」がオープンした。そうした建設ラッシュはさらに、1970年のEXPO'70（大阪万博）へと続き、正に「岩戸景気」から「いざなぎ景気」と呼ばれた高度経済成長期の真只中である。建設業界ではのちに「黄金の60年代」などとも言われ、「メタボリズム（代謝建築論）」が60年代の支配的なイデオロギーであった。

しかも、そうした高度経済成長の産業界を支え推進するのは理工学分野であるとされ、すでに1950年代中頃から「理工系ブーム」が訪れ、理工学部には志望者が集中し、暫くは高い受験競争率を見せた時代でもあった。そのため当時の全国の大学では、理工系学部学科の新増設が盛んに行われた。中でも、花形産業の一つとしてもてはやされた建設業界を担うため建築学科も多数創設された。本学科もまさにその時流に乗った開設と言うことになる。

因みに、この時期の大学建築学科新設数（国・公・私）の推移を見てみると、

1961（昭和36）年2校、62年2校、63年3校、
64年5校、65年12校（含・本学科）、66年6校
67年5校

という具合である。

本学科発足時の学生定員は1学年80名であったが、資料を見ると、初年度入学者（第一期生）数は156名で実に定員の2倍である。しかし4年後の卒業生数はというと、なんと88名であり、入学者の半数強に過ぎないという厳しさであったことが分かる。これは谷口学科長の「新

* 教授 建築学科
Professor, Dept. of Architecture

設の学科を社会に認めてもらうためには、まずは優秀な一期生を世に送り出し信頼を得ることが重要である」という信念によるもので、初期生は可成り絞られたものである。その後も約2倍の定員オーバーが継続するが、二期以降は留年生を含めて180名前後の卒業となった。

3. 横浜キャンパスでは

さて、こうして建築学科が出発はしたものの、当時の横浜キャンパス内にもまた建設ラッシュの中にあり、1号館から10号館までのキャンパス・マスタープランがRIA（現・株式会社アール・アイ・エー）によって提案され、私が着任した時には、まさに8・9・10号館が足場に囲われて突貫工事の最中であった。今日では1号館（本館）と2号館（講堂）は跡形もなく、3・4号館は1/4にカット縮小され、かろうじて5～10号館が往時の姿を止めているが、6号館はかつて図書館であった。

そんな訳で、学科発足時にはまだ独自の居場所（現在の8号館や12号館）は全く無く、4号館の1・2階に1室ずつの間借りをしていた。1階の一室には、白濱謙一教授（建築計画、設計製図）、川崎浩司助教授（建築基礎構造）の両先生が、2階の方には谷口忠学科長、堀口捨巳教授（建築意匠、日本建築史）、竹島卓一教授（図学・東洋建築史）と、渡辺要非常勤教授（計画理論、建築設備）という錚々たる先生方が、小学校の教員室のように机を並べて居られ、その手狭な部屋の大先生方に混じって、申し訳ないことに私も机を並べるようになった。

その頃は、連日何十個となく搬入されてくる多種多様の新しい機材（主に構造・材料・設備の実験用機器類）についての確認・受領と帳簿への記載、そしてその一つ一つに記号のラベル貼付やペンキ記載などを行い、4号館1階の倉庫に整頓収納する作業とともに、授業の準備やアシストに追われる多忙な日々だった。

最初の1年生（第一期生）への授業は、もっぱら前年9月に竣工していた7号館を使ってなされていた。やっと8号館が完成し、4号館からの移転が行われて先生方が研究室に入られたのは、翌昭和41年1月に入ってからのことである。その4月に進級してくる新2年生のために、8号館製図室の製図机や製図板等の準備が大急ぎでなされた。製図机は、アングルを溶接して天板を張るシンプルデザインで（上級生用は脇棚あり）白濱先生が設計された。製図板に傾斜を付けるための三角形の木製の枕と耐水ベニヤ製図板をその上に置き、T定規を使用するものであった。その製図机は非常に頑丈に出来ているため、40年以上を経た今でも4階の製図室で十分使用に耐えている。その後、平行定規製図板を導入することに

なり、傾斜をつけ、かつ模型などの作業のために立てて固定する器具を設計発注して現在の状態になっている。

近年では、ほとんどの学生がCAD使用となり、3・4年用の製図机と製図板の多くは廃棄処分されてしまったが、未だに6階製図室で見かけることは出来る。しかしほとんどが本来の用途には供されていないようである。

このように、学生の受け入れ準備はいささか泥縄的ではあったが、当時のカリキュラムでは専門科目（殆どが必修）は基本的に2年次からになっていたのも、これでも何とか間に合わすことができたのである。

4. 12号館のこと

こうして、8号館の4～6階に何とか先生方の研究室も整い、2年次からの製図の授業も出来るようになりほっとしたのも束の間で、次は、翌年の新3年次の学生実験や研究実験のための準備をしなければならない。それは「建築総合実験所」（12号館）の建設である。

とはいうもののまだ建物の構想はなく、どのような実験をするのかも全くの白紙状態であった。ただ唯一明確であったのは、まず何と言っても谷口忠先生の永年の夢であった「構造物用動的試験装置」なる実物大実験が可能な巨大な装置を設置することだけである。そのため、建物の設計に先立ち、なによりもまずその機械と基礎の設計に取りかかり寸法を割り出す必要があった。島津製作所との機械の打ち合わせはもとより、その巨大な基礎部分に関しても谷口先生自らが構造計算をされた。その計算書を持ってこられては私に配筋図を画くように指示され、さらに様々な位置での（配筋の）断面図の要求があり、手書きで何十枚となく製図を行った（CADがあればどんなにか楽だったろう）。しかも、先生は帰宅されてからも計算をやり直されることも度々で（当時は計算尺）、翌朝にはやり直した新たな計算書を持ってこられて、再びその配筋図の作図を行うなんてことはしょっちゅうで、一夜で前日の配筋図は没となるのである。設計事務所にいたときには、意匠図は連日徹夜でも沢山画いていたし、現場でも配筋図を読みながら監理をしていたというものの、まさか神奈川大学に来て自分が配筋図を画く羽目になろうとは思ってもみなかったことである。

こうして、実験室の目玉とも言うべき「構造物用動的試験装置」の設計と試験体の搬出入方法・測定位置などの計画が終わった段階で、いよいよその他の構造・材料実験装置とその計測のためのスペースや動線などを勘案しつつ、さらに環境・設備関係の実験についても、東工大の勝田千利先生（後の本学科教授・学長）に相談に伺いながら基本計画のエスキスを行った。ただし私がタッ

チしたのはその基本計画のエスキスまでで、実施設計はRIAが行うことになり、その後は一切関与できなかった。残念ながら、そのときのエスキスの過程に関する資料等は全て逸散してしまい、いまは見ることができない。

その現場でも、まず最初に「構造物用動的試験装置」の杭打ちと基礎工事から始まり、それが出来てから建物に取りかかるという工程であった。こうして1967年6月12号館が竣工し、4号館の倉庫から機材も搬入された。

その後も基礎部についてはほぼそのまま、新たな試験装置を交換設置して利用され続けている。

5. 当時の学内状況について

第三期生を送り出した1970年に開催された大阪万博が一つの区切りのように、さしもの1960年代の高度経済成長にもいささか翳りが見え始めた。それまでの華やかな成長・繁栄の背後で蓋をされてきた様々な矛盾（自然や生活環境の破壊・汚染と公害問題など）が徐々に噴出し始め、3年後のオイルショックによってそれまでの高度成長が終焉を迎え、一変して実質マイナス成長になってしまう。途端に建設業界は不景気風が吹き荒れ、第六期生達からの就職は極めて困難な時期に突入してしまった。せっかく順調に就職先を開拓し、卒業生達もどうやら社会で認められ活躍し始めた矢先のことである。

この頃の学内状況に目を転じると、「1968 (S. 43) 年1月22日、3号館前で学生が『原子力空母エンタープライズ佐世保寄港阻止支援カンパ』活動を行っていたところ、これを職員が学生の政治活動などを規制した『学内規定』に基づき制止したところ、学生達は強く反発しやがて全学をおおう紛争へと進展し、その後の学内民主化の発端となった。」（「神奈川大学 50 年小史：紛争の発端と経緯」）とある。以来、新たな「学長選考規定」の制定とそれに基づく新学長の選出・就任（1977年4月）までの凡そ10年にも及ぶ民主化への試行錯誤が続けられた。

そうした中、1968年2月に「教授会の構成を専任講師以上に改正」があり（それまでは助教教授以上）、私は運悪く（？）その翌年4月に専任講師へ昇任してしまったために、突然連日連夜にわたる教授会やら団交やらに出席せざるを得なくなってしまった。当時の教授会は全学教授会であって、学部学科に関係なく全教員による会議であった。そのお陰で、他学部の先生方とも隣り合わせになり、親しくお話する機会を得ることができた。あの「ドン・キホーテ」の最初の全篇完訳刊行をされた、著名なスペイン文学者の会田由先生とも、たまたま隣り合っ

て色々とお話したことなどが記憶に残っている。

そうした闘争の中の一つのテーマとして「カリキュラ

ム改革」があった。始まって4年ばかりの建築学科でもその基本方針に沿って大きく変更せざるを得ず、大わらわで1969年3月に「新カリキュラム」として改訂・決定した。その大きな改訂点は、それまで専門科目の殆どが必修科目（80単位）であったのを、約半分の40単位とし選択の余地を広げたこと。同時に、卒業研究における、「論文」と「設計」の両方とも必修から、いずれかの選択必修に変更したことなどが上げられる。

その後も、「大学立法」反対無期限ストの決定と全共闘による本館と3号館の封鎖。教職員による封鎖解除。以後も部分的封鎖の繰り返し。大学による休講措置と学外教授会。教学執行部によるロックアウトの強行と解除などなど。ついに1975年度には学年末試験のレポート切り替え措置がとられた。建築第八期生が4年の時である。

また当時の学生運動のスローガンの一つに、「産学協同反対」というのがあった。今日では大学に「産官学連携推進室」が置かれ、むしろ積極的に連携・協同することが奨励されている。こうしたことを見るにつけても、隔世の感がある。

6. あるコンペのこと

そうした学生運動の対応に追われる中、落ち着いて製図室で設計を楽しむことも出来ない学生達に、設計の面白さを少しでも体験してもらおうと思い、少々無謀ではあったが、1971年に研究室で国際コンペにチャレンジすることにした。対象は「NEW NATIONAL HEADQUARTERS FOR TANU, AT DAR ES SALAAM, TANZANIA」である。要求は、基本的にTANU (Tanganyika African National Union) 国民党本部、国民議会議事堂、国民文化センター からなる延面積約30,000㎡という大層なものである。締切は12月31日消印までであった。

6月中頃に登録料US\$20を送金し、要項が送られてきたところで細かな設計条件について共通認識を持っために、みんなで翻訳作業やらダイアグラムの作成などを行い、その後送られてきた質疑応答書についても同様な作業を行い設計要件への理解を深めた。メンバーはゼミ生（第四期生）を中心に希望する1年生まで含め10数名だったと思う。「ヘイ・ジャンボ!」、「スー・ジャンボ!」などの現地語の挨拶が飛び交って楽しい作業であった。

ところが、エスキスやスタディ模型づくりなどいよいよこれからという10月31日に、教学執行部による突然のロックアウトが行われ、全資料は研究室の中に置いたまま誰も学内に立ち入ることが不可能になってしまった。やむなく学生達と街の喫茶店などに集まり、いつまで続くかわからないロックアウトなので、コンペを諦め

るかどうかの相談の日々が続いた。諦めかけた 11 月 19 日にロックアウトは解除されたが、20 日間の空白は取り戻すべくもなく、それからの作業の大変さは言うまでもない。手書き図面を青図屋に、模型写真フィルムは DPE 屋へと走り、学生達と大晦日の郵便局に駆け込み、除夜の鐘を聞きながら帰宅したのも今となっては良い思い出である。結果は駄目だったが、なによりも、ものの造りの熱気や楽しさを味わってもらえたと思っている。いまでも時折、卒業生と当時のことを語り合うことがある。

7. 地域との関わり

1985 年秋には、「建築学科創設 20 周年記念」を盛大に祝うことができた。その 1980 年代後半には、いわゆる「バブル景気」の時代を迎え、再び就職も引く手あまたの時代を迎えていた。この頃の卒業生諸君は本当に幸運な巡り合わせであったと思う。

研究室では、1976 年のゼミ（第九期生）から数年間にわたり、当時ヘドロで汚れ埋め立てられようとしていた横浜市内の河川（多くは運河）に注目し、サーヴェイとアンケートや聞き込み調査を実施しながら、「横浜の運河—都市の中の河川」というテーマで討論を行っていた。これは後に、1987 年度から 3 年間にわたる「横浜市地域研究費補助金」の交付をうけて、「横浜の『親水空間』—運河から見た横浜の都市構造とその景観」という成果報告書（横浜市総務局行政部教育課）にまとめることが出来た。このことに関しては、横浜市大での講義や横浜シティガイド協会のガイド養成講座などで何度かお話しする機会を与えられた。

そうしたこともあり、またそれまでのいわゆる「箱物」造りが一段落した時期ということもあって、世は利便性を求める物的な環境づくりから快適な生活環境（生活景）の創出へと目を転じつつあり、1980 年代後半からは、横浜市や神奈川区からの街づくりに関わる調査と基本構想策定などの委託を受ける機会が多くなった。

私としても、せっかくの知識や技術の蓄積を社会に還元できるひとつの良い機会であると捉えていた。しかし大学側には、当時そうした受託などの受け皿に関する十分な態勢が整っておらず、市長と学長との契約書作成や金銭の管理など余計な仕事がいっつもついて回っていた。

その委託業務の幾つかを列挙してみると、
・「新子安駅周辺地区整備構想調査報告書」（神奈川区 1988. 3）
・「区の魅力づくり実施計画策定調査報告書」（都市計画局都市デザイン室 1988. 3）
・「東神奈川駅周辺地区整備基本構想策定調査報告書」（都市計画局再開発課 1989. 3）
・「よこはまビューポイント整備基本構

想策定調査報告書」（神奈川区 1990. 3）
・「公共モニュメント調査報告書」（建築局 1992. 3）
・「東横線地下化に伴う反町駅周辺等のありかたに関する調査報告書」（神奈川区 1992. 3） などがある。

「東横線地下化」に関する調査報告書は、東急東横線が地下化されるという情報を受けて、神奈川区がいち早くその跡地利用についての指針を示そうそうとして私の研究室に調査委託したものである。この報告書を下敷きにして、更に 1996 年 11 月から 1998 年 3 月までの約 1 年半の間に 7 回の「東横線上部利用懇談会」がもたれ、様々な角度からの検討と計画に関する具体的要望がだされた。そのメンバーは、横浜国大教授と助教授各 1 名、横浜市企画局長・緑政局長・道路局長・都市計画局長・神奈川区長、東急交通事業部工事部長、周辺地域の自治連絡協議会会長、その他私を含めて総勢 16 名であった。最終的には、「東急東横線地下化に伴う鉄道上部用地の利用に関する提言書」（平成 10 年 3 月）としてとりまとめられた。

現在、東横線はすでに東白楽駅を出てすぐに地下に入り、横浜駅の最下部を通して「みなとみらい線」となり、元町・中華街駅に至っている。さて、東白楽駅から横浜駅までの間の跡地は、現在、基本的には報告書の提案通り「緑道」としての整備工事が進められているが、まだ工事の困りがしてあるので一寸目には何をしているのか分かりにくいようである。しかしやがては緑道によって、神奈川工業高校脇から反町駅前の国道 1 号線を跨ぐ高架の旧東横線ガード上を通り、反町トンネルを抜けて横浜駅付近まで散策が出来るようになるだろう。

8. ヨーロッパ建築研修旅行のこと

在職中には、中断しながらも計 10 回の「ヨーロッパ建築研修の旅」を企画・実施した。企画のみで同行しない場合もあったが、春休みの 2～3 週間で極めて効率良く建築・街・都市を巡る旅で、移動と宿のみは一緒に、日中は殆どが自由行動という旅である。デザインが生まれ出る基盤となる人々の生活や文化を体感することが重要で、参加した諸君には極上の栄養素になったことと思う。OB に会うと、今でも良くその時の楽しい思い出話になる。

9. おわりに（謝 辞）

昨今の大学を取り巻く状況はますます厳しくなる一方ですが、これからは外にあって、神奈川大学の発展を見守っていきたいと思っています。長いようでもあり、あっという間のことにも思える 40 数年間でした。この間には、非常に多くの教職員の方々にお世話になり、末筆ながら心より御礼申し上げます。有り難うございました。